

『源氏物語』 「少女巻」 における夕霧の初任叙位

菊 地 真

大殿腹の若君の御元服のことおぼしいそぐを……四位になし
てんとおぼし、世人もさぞあらんと思へるを、まだいときび
はなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなか
らんも中々目馴れたことなり、とおぼしとどめつ。浅葱にて
殿上に還り給を、大宮は、飽かずあさましきこととおぼした
るぞ、ことはりにいとをかしける。(『源氏物語』一) 「少女」二

八一頁 新日本古典文学大系 九四年 以下同

ここで、夕霧の元服後の初任について(「光源氏」)四位になし
てんとおぼし、世人もさぞあらんと思へるを……という箇所が
古来、未解決の問題となつてゐる。それというのも、史実例とし
て孫王といえども賜姓皇子の子で四位に初任された例はないから
である。本稿は何故夕霧を四位に初任できる光源氏のみならず世
人までもが思つたのか、言い換えれば賜姓皇子の子である孫王が
初任で四位になれることを世間が納得したのは何故かというこ
との説明を律令・先例・時代傾向の調査・分析を通じて試みるも
のである。

夕霧が史実でない特例を認められる理由はないわけではない。
選叙令・継嗣令にいう「親王」の範囲、時代の傾向が賜姓皇子孫
の血統をどの程度尊重するか、政權担当の子であることは特例待
遇を合わせて考えると物語故の虚構ではなく、『源氏物語』の書
かれた時代の世相は夕霧の初任四位を容認するものであつた。

日頃の政務として先例を勘案しながら令を解釈・運用していた
平安貴族とその家族にとつて、「政權担当者にして一世源氏の子
の初任処遇は如何にあるべきか」という仮想題は知的興味をそそ
るものであつたであらう。自分の属する世間の束縛にとられず
に仮想題をあれこれ考へるという、いわば「律令解釈を遊ぶ」興
趣とでもいふべきものがここにある。本論はこの「興趣」を明ら
かにしていくものでもある。

—

問題箇所の解釈の仕方で古注釈は概ね三つの方向に分類でき
ようである。

元服後叙四位例 承和元年忠良親王加冠即叙四位 同四年正

道親王於殿上加冠即四位 源融朝臣於内裏加冠叙正四位下

〔紫明抄〕、山本利達校訂『紫明抄・河海抄』玉上琢彌編 六八年

〔紫明抄〕では親王の子は四位に初任されるとするだけで止めているが、これを踏襲しているのが池田亀鑑校注『日本古典全書

源氏物語 三〕、山岸德平校注『日本古典文学大系 源氏物語

二〕、柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『新日本古典文学大系 源氏物語 一〕。

選叙令曰凡薩皇親者親王子子從四位下諸親王不限有品無品皆是一部内

令称親王不注品附者皆依比例孫正直叙四位事上古定事也見続日本紀等不違具錄 源興基彈正尹人康親王男貞觀八年正月七日叙從四位

下元無位源博雅兵部卿克明親王男承平四年正月七日叙從四位下同元

無位親王子直叙四位雖為流例一世源氏大臣息大略叙爵歟 源

叶信光大臣子同靜光大臣子伊涉兼明親王子 忠賢高明大臣子 皆是叙從五

位下者也 六条院于時大臣也如何因茲四位になしてんかしと

思給へとも猶有斟酌歟 〔河海抄〕、石田穰二校訂『紫明抄・河

海抄』玉上琢彌編 六八年

〔河海抄〕は孫王であつても親王の子と違って賜姓皇子の子には初任四位の例がないことを述べて「猶斟酌有るか」と結論を保留している。この趣旨を引き継いで「花鳥余情」は賜姓皇子の初

任四位に前例はなくとも「源氏の君よのつねの源氏の同列にあら

ず」(松永本花鳥余情、伊井春樹編『源氏物語古注集成』七八年)と特

例を探っている。この立場に立つ古注釈は、「一葉抄」・「休聞

抄」で、「湖月抄」も「河海抄」と「細流抄」を引戴しつつ師

(箕形如菴) 説として「河海抄」に従うべしとしている。現代では

阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注『日本古典文学全集 源氏物語

三〕、石田穰二・清水好子校注『新潮日本古典集成 源氏物語

三〕がこれを踏襲している。

源氏は内大臣にて摂政し給ひ、ことに夕霧秀才なれば、四位にこそ成り給はめと世人もおもひしに、源氏自体有て六位になし給ふ。(『源氏物語提要』、稲賀敬二編『源氏物語古注集成』七

八年)

「花鳥余情」と基本的には同じ趣旨ながら光源氏だけでなく夕霧自身の優れた資質を特例の理由とするのは「源氏物語提要」である。同様に光源氏の子という以外の本人の美質等の要素に特例

の生ずる原因を探す方向にあるのは、「細流抄」・「明星抄」・「孟津抄」。現代では玉上琢彌『源氏物語釈』がある。

古注釈以来現代まで、賜姓皇子の子で四位に初任された例がないという史実に対する特例が採り続けられているが、未だにこれ

が明確でないようである。私は夕霧の初任四位を可能にする特例は三つの要素から生じ得ると考える。その一つは律令の文言解釈

二つに賜姓皇子・政權担当者の子の初任叙位実績、三つに賜姓皇

子という血統の高貴に対する意識である。

二

夕霧が四位に初任される可能性を賜姓皇子の子に関する律令解釈・運用の点について考察する。

選叙令第十二 三十四条 凡授位者。皆限年廿五以上。唯

以_レ蔭出身。皆限_二年廿一以上_一。

「選叙令第十二」三十五條 凡蔭_二皇親者_一。親王子從四位下。

諸王子從五位下。其五世王者。從五位下。子降_二一階_一。庶子

又降_二一階_一。唯別勅処分。不_レ拘_二此令_一。

「選叙令第十二」三十八條 凡五位以上子出身者。一位嫡子從

五位下。庶子正六位上。二位嫡子正六位下。……三位以上蔭

及_レ孫。降_二子一等_一。……

「繼嗣令第十三」一條 凡皇兄弟皇子。皆為_二親王_一。女帝子又同。

以外並為諸王。自親王五世。雖得王名。不在皇親之限。

〔日本思想大系律令〕井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫校注 七六年

「選叙令第十二」三十四條では初任は二五才が原則で蔭子孫の

み特例的に二一才の初任を認めるという。これについては延暦十

四年十月の官符以前は蔭子孫と言えども諸舍人として出仕の後に

成選年限が満ちて始めて位を授けられたが、この官符以後は二十

一才になれば舍人等の実績がなくとも必ず叙位にあずかるものと

なった。光孝朝を実現した功労者基経の子の五位初任年齢はこの

原則に対してさらに大幅な若年初任の例外を認められた。「選叙

令第十二」三十八條によれば臣下の子蔭位是一位の子でも從五位

下に叙せられるのが最高の待遇だが、この原則についても基経の

子息以後撰閣家出身者には例外が認められていく。

「選叙令第十二」三十五條によると「凡蔭_二皇親者_一。親王子從

四位下。」とあり、これによると「親王子」、つまり孫王である場

合に「四位になしてん」と考えるのも理由があることになる。問

題は孫王であつても夕霧のような賜姓皇子の子が「親王子」にあ

たるか否かである。この規定解釈の論点は「賜姓皇子」という概

念をどう解釈するかにある。換言すると賜姓皇子は選叙令にいう

「親王」に含まれるかという事である。「繼嗣令第十三」一條では

「凡皇の兄弟、皇子をば皆親王と為_レよ。」とある。これは唐の「封

爵法」を範としたものであるゆえ唐法の法意によつて解すべしと

いう立場をとると、「繼嗣令第十三」にいう「親王」とは天皇が

決まれば必ずから決まるもので賜姓皇子も当然これに含まれると

も解釈されることになる。一方、唐法のように親王と王の明確な

区分を明文文化⁽⁷⁾していかないのだから、むしろ唐法の定めるのとは

違った親王・王の法律区分を律令は意圖したとも解釈できる。こ

の立場をとると、賜姓皇子は律令上の「親王」にも「王」にも該

当しない臣下であると解釈することも可能となる。つまり律令の

文言解釈としては賜姓源氏は「親王」とも臣下とも扱いうるとい

う二様の解釈のいずれもそれなりの理由があるということである。

淳仁天皇の天平宝字三年六月十六日、それまで皇子は生まれな

がらにして親王であつたのを改めて親王宣下を受けて後に親王と

称することになり、これによつて二世以下の者でも親王となりう

る反面、皇子でも親王となれない場合があり得ることとなった⁽⁸⁾。

しかし宣旨次第で親王にもなれば臣下にもなつてしまふと割り切

る措置には抵抗があつたようである。嵯峨天皇の時には一世源氏

は初任について一般臣下と同格と扱われていたが、嵯峨天皇没後

に源明がいきなり四位に叙任されたことでこの基準は覆されてし

まい、更に下つて醍醐朝末の延長八年九月八日に無位一世源氏の

座次は五位の上で四位の下と定められた⁽⁹⁾。つまり嵯峨天皇までは

一世源氏は臣下であるとする淳仁天皇以来の解釈が通説であったものが嵯峨天皇没後は親王に准ずる考えに近づき、醍醐朝末期には無位一世源氏が無品親王に準ずる扱いとなったのである。朱雀朝以後での一世源氏の地位は一般臣下というよりは「親王」に近い扱いになっていた。この理由を推察するに、律令体制が堅固な時代は皇帝権の発動たる宣旨の權威が血統の高貴に勝っていたものが、律令体制の緩みと共にわが国古来の伝統たる血統の尊重意識が復活したとも言えようか。しかし一世源氏が親王と同格と見なされる時代になってまもなく、安和の変で源高明が失脚し、円融朝の貞元二年に源兼明・源昭平が現職を取り上げられた上で親王に戻されて、一世源氏の廟堂での特權的な姿は見られなくなってしまう。花山朝以後の史例に一世源氏の子の初任特例がない理由はこのにある。しかし一世源氏が廟堂から姿を消したことは律令の文言解釈そのものとは直接関係ない。

以上を要するに、一条朝までの廟堂での律令解釈・運用の傾向では一世源氏は親王と等しく解される方向に進んでいたことと、律令の文言解釈の可能性を考慮すれば、夕霧も「親王子」として初任四位とされる可能性はある。

三

次に平安中期までの一世源氏、孫王・摂関家子弟の実際の初任例の調査により、夕霧の初任四位の可能性について論ずる。(資料)は記録類を基本に、それらの不審・不備な点を『公卿補任』¹⁰で補って作成した。公卿にまで至った者のみを考察対象としたの

は、夕霧との比較において議政官としての昇進を考察できない者を除外した方が良いと判断したからである。(資料四)の摂関子弟の初任叙位一覧について、冬嗣の子弟から始めたのは「摂関家」が他家を圧倒し特殊な家門となり始めたのはこの頃からだからである。

賜姓皇子の初任叙位を時代別に見ると源融までは初任叙位が定まり無く、あるいは良峯安世のように地下人から始まる例があったり、あるいは源定のようにいきなり公卿であつたりで、前述の律令解釈をめぐる混乱を伺わせている。この混乱も源勤の初任された仁明朝以後は落ちついてきて、賜姓皇子の初任は従四位上に固定された。(光孝源氏の二人(是忠と貞恒)は光孝天皇の親王時代の初任ゆえ皇子としては扱われていないのだから除外して考えて良い)賜姓皇子の初任叙位例の確立の反面、その形式化も指摘できる。

平安中期頃の例では従四位上であればそのまま参議として公卿の仲間入りできる位階だが、源生以後の賜姓皇子で二十歳代で公卿になれた者は十三人中四人(源多・源能有・源是忠・源高明)しかない。初任叙位の位階が議政官になれるという実質を伴ったものでないという認識は『源氏物語』『少女卷』における光源氏の夕霧を四位に初任することの躊躇の原因でもあるようだ。つまり特例として四位に初任されても実質は伴える保証はないのである。

一方、賜姓皇子の初任叙位について扱いの一定していなかった淳和朝までの四位は実質を伴っていて、四位に初任された賜姓皇子のほとんどが三十才前半までに参議に任ぜられている。又仁明朝以後の初任叙位の従四位上に固定化の後には、母親の地位による

差は見られない。本人の出自等の立ち入った事情を考慮しない点からも賜姓皇子の初任従四位上は形式的なものになっていると知れる。

以上のように律令に明文のない賜姓皇子の初任叙位については、「選叙令第十二」三十五条の「親王子従四位下」より一階上の従四位上に固定化されていたことがわかった。これは臣下に適用される「選叙令第十二」三十八条ではなく、皇親に適用される「選叙令第十二」三十五条を基本として、天皇の孫である「親王子」よりも子である賜姓皇子を格上として「親王子」の一階上の初任としたと推測される。つまり律令解釈、運用にあたつて一世源氏は「皇親」と扱われていることを指摘しておきたい。

〈資料二〉は平安初期から中期にかけての公卿に至つた親王の子の初任叙位一覧だが、これによると初任の年齢は不定ながら、ほとんどが律令の規定どおり初任は従四位下となっている。例外は高枝王、在原行平、源兼忠。高枝王は初任年齢が六十七才と高年齢であることを考慮して規定より高位の従三位で、逆に行平・兼忠の場合は規定よりも低い。行平の場合は親王の子であつて賜姓者の現れ始めの頃ゆえ、これを律令に言う「親王子」として扱ふべきか一般臣下と見なしてしまうか、律令の解釈が一定していなかったことの反映と考えるべきであろう。行平は平城天皇の孫王、兼忠は文徳天皇の孫王と、直系が皇統から離れた天皇の孫王は扱いが低い。賜姓皇子の尊貴はあくまでも当代天皇との近縁の意味においてすることは、「親王子」の扱いについて形式が確立しておらず、廟堂はその度ごとに処遇を考慮していたことを伺わせて

いる。以上の三名の例外を除き、醍醐朝以後の親王の子であれば従四位下に叙されている。これは賜姓皇子の初任従四位上への固定化とも歩を一つにしている。親王の子の従四位下が参議となれるという実質を伴つていたかどうかを公卿に任じられた年齢によつて判断すると、二十才代で参議になつた者は一人もいないことから親王の子の従四位下には実質は伴っていない形式的なものであつたと言える。三十才代前半で参議に補せられたのは雅信・忠清の二人だけである。⁽¹⁾以上のように親王の子で賜姓者は律令の規定どおり従四位下に初任叙位されていたが、但し、それには官職の実質を伴つていなかった。

それでは孫王ということでは同格のはずの賜姓皇子の子はどう扱われていたか。〈資料三〉の賜姓皇子の子の初任叙位一覧によると大多数は初任従五位下以下である。賜姓皇子が廟堂の首席になつた時にその子が初任された例は源常が左大臣の時の直と、源融が左大臣の時の昇の二例があるが、いずれも初任は従五位下である。源伊勢以後の例は全て年齢による買官の初任であり、一般臣下との差は名実共に無くなってしまう。つまり、先例として賜姓皇子の子が従四位下に初任で叙された例は無い。

しかし、賜姓皇子の子は孫王でありながら全く一般臣下と同格の扱いであつたのではない。前述のとおり「選叙令第十二」三十四条によれば二十一才までは五位に初任されていなの为原则である。この原則は陽成朝までは臣下の初任に際しては守られていたが、光孝朝以後は皇子・孫王・摂関子弟は皆二十一才前に初任されるように変わる。この傾向は一条朝に入るとさらに加速して、

伊周が十二才、隆家が十才、頼通が十四才、教通が十一才と極端な若年叙任が目立つようになる。しかし光孝朝以前では二十一才前に従五位下に任ぜられた摂関子弟は基経の十九才の例だけで、しかもそれは初任ではなかったのに対して、賜姓皇子と賜姓皇子の子の大部分が二十一才の初任である。これは「選叙令第十二」三十四条の原則に対する例外的な特権である。賜姓皇子の子にも特権はあつたのである。しかしその特権は光孝朝以後は摂関子弟にも認められるものとなり、また円融朝以後には賜姓皇子そのものがいなくなつてしまつた為と比較のしやうがなくなつたのである。しかし、賜姓皇子が姿を消したことがその尊貴を否定したり忘却するものでなく、かえつてその尊貴なことを懂れる風潮となつたようである。《資料二》の後一条朝以後の数少ない孫王の扱われ方を見ると、いづれも摂関家子息並に若くそして摂関家子息以上⁽¹³⁾に高位で初任されている。

夕霧が廟堂の実権者の子であつたことを考慮して摂関子息の初任叙位例を調べる。《資料四》を見ると、摂関子息が初任で四位になる特例は見つからないが二つの点で律令の原則に対する特例が認められている。その一つは光孝朝以後の初任年齢の若さで、これは基経の光孝天皇擁立の功により認められたものであらう。⁽¹⁴⁾もう一つは初任位が従五位下よりも高位の者が散見されることである。時平・仲平・忠平・公季・頼通・教通が正五位下、頼宗・能信・長家が従五位上と「選叙令第十二」三十八条からは導き出せない高位で初任されている。さらにこの叙位のいくつかは「選叙令第十二」三十八条に定めない「別勅」による初任となつてい

る。そもそも別勅処分は皇親の初任を定めた「選叙令第十二」三十五条にあるもので、臣下に適用される同令三十八条にはないのである。つまり初任位の高さと別勅によることを考慮するならば、藤原氏と雖も時平らは皇親に適用されるべき「選叙令第十二」三十五条を基本的に適用されていると推定できる。この条の適用を受けるということはその被適用者に皇親に准ずる要件が備わっていると見なされたからであらう。摂関子息でこの特例を採られた者に共通しているのは母が三世以内の皇孫であるということである。特に公季の場合、父師輔の没後の初任という不利な状況にもかかわらず特例を引き出したのは、その母康子が朱雀・村上二代の同母姉という圧倒的な血統の良さが原因と考えざるを得ない。つまり臣下の子であつても政權担当者の一族であつて母の血統が皇統に近接している者は皇親に準ずると見なされたのである。⁽¹⁵⁾初任正五位下とは、「選叙令第十二」三十五条の「親王子」の従四位下の実質的一階下ということである。つまり同条の適用を基本としつつも、天皇との血縁が母方であることを考慮して「親王子」から実質的に一階下げた結果であると推測できる。

夕霧は現在の政權担当者的子であることは時平らと同様であるが、皇統との血縁は時平らが母方であるのに対して父方である。以上の条件を考慮すると夕霧は「親王子」そのものでなくとも「選叙令第十二」三十五条が適用されて、時平らの初任位よりも一階上の位階を与えられてよいことは、令の文言解釈、初任先例の吟味から納得できることである。正五位下の実質の一階上は従四位下である。加えて、平安中期の廟堂の律令の解釈・通用が

一世源氏を親王並に扱う方向であることは指摘したとおりであり、こうした一条朝の傾向を考慮すれば夕霧は令解釈上の「親王子」そのものと見なされる可能性も十分ある。

〔資料四〕を見ると、光孝朝以後摂関家子息の公卿昇進は早く大部分が初任から十年程度、年齢にして三十才前後で公卿に任じられている。しかしこれも光孝朝以後のことであり、それ以前でこうした早い昇進をしたのは一世源氏であった。あたかも光孝朝以後の摂関子息は一世源氏の特権を引き継いだかのような観を呈を示している。夕霧は十二才で初任され、一年後に五位侍従、その翌年に四位の格である中将、その翌々年までには宰相中将となり公卿に列せられている。これは一条朝の摂関子息と同等以上のスピード出世と言える。時代は『源氏物語』執筆時より少し下があるが〔資料二〕の頼通の猶子で道長の実の娘の尊子と結婚した源師房の昇進の様が夕霧とよく似ているのに気付く。これは一条朝前後の時代風潮として、賜姓皇子孫を尊ぶ傾向が増幅していく傾向であることを示すもので、夕霧を見る目は師房と同様であったことを指摘できる。

一条朝には夕霧のような一世源氏の子はもはや存在しなかったので史実の例はなくとも、『源氏物語』の読者たる平安貴族ならば、夕霧の初任四位が可能なことは、その解答にたどりつくことの比較的容易であったのではないか。

一方、初任四位の要件を備える夕霧を、光源氏が六位として大学に入学させたのはなぜか。それも平安中期の廟堂の事情を知る者にとって難しくない問題であったと思われる。ここまで繰り返し

し指摘してきたように、一世源氏・孫王の初任四位が確立されるのと並行してそれが官職の実質を伴えない形式だけのものとなってきたことがその理由である。冒頭の引用本文の後の「少女巻」の光源氏の言葉にも

「時移り、さるべき人にたちをくれて、世衰ふる末には、人に軽め侮らるるに、とるところなきことになむ侍。なほ才をもととしてこそ、大和魂の用ゐらるる方も強う侍らめ。」

とあるのは孫王の形式だけの高位が実質を伴えないものであることを認識したものではないか。『公卿補任』正暦五年の記事には、天延三年に大納言源雅信が二十五才の子の扶義を「教学為先」の理由で文章生にさせたとある。天延三年当時の廟堂にあつて四番目の高位で源氏としては兼明に次ぐ地位にあつたエリートの雅信が、子に対してとつたこの態度は同時代の『源氏物語』に少なからぬ影響を与えたことであつたろう。

四

以上、夕霧が初任四位を容認される理由をまとめると、

(一) 一世源氏が選叙令にいう「親王」と扱われる傾向は時代が下るにつれて可能性を増してくる。

(二) 賜姓皇子孫の尊貴なことへの憧れは時代がくだつても変わるものではなく、むしろ増幅しているとも言える。

(三) 政権担当者の子息には母が皇親の場合に限って初任に特例が認められる場合がある。

最後に、こうした平安中期の令解釈・運用の傾向が『源氏物

語」に影響を及ぼしている意味について考えて結びとする。先学の中には藤原氏の極盛期に「源氏物語」が書かれたのは、この時代の栄華を実際に享受・満喫していたのはあくせく苦勞した摂関家の男性でなく妻室として納まった源氏の女性たちであつたという指摘がある⁽¹⁷⁾。「栄華の享受者ゆえに栄華の主役」という理由づけには従いかねるが、今日「藤原摂関家極盛期」と位置づけられている時代が実は「源氏の栄華の時代」として当時は認識されていたという発想は正しい方向と考える。

これまでの調査でわかつたように摂関家の初任叙位の特例は政權担当者の子が天皇の血族となる、すなわち「源氏の属性」を獲得した時にのみ与えられた。摂関家が他家を圧倒する為には政略による排除の一方で、姻戚関係によつて「源氏の属性」を獲得することが必要であつたのである。後宮・親王家へ娘を嫁がせる一方で天皇・親王の娘を娶ることで「源氏」に近づくことこそ摂関家の究極の目的であつた。円融朝以後数なくなつた源氏を極力親王同様に扱うのも姻戚関係により摂関家に「源氏の属性」を与えてもらわんが為である。源氏の血統の高貴なことへの憧れも「源氏の属性」獲得を目指した摂関家の姿勢の反映である。摂関家は「源氏の属性」を持つことで他家との差をつけて特權確保に努めた。この意味において「藤原摂関極盛期」は「源氏」の栄華の時代であつた。夕霧の初任四位の可能であることは、「源氏」の栄華の時代たる摂関極盛期の貴族社会の秩序維持の爲の必然であつたのである。つまり「源氏物語」は「現代」の世相を深く洞察していたがゆえに夕霧の初任を「四位になして」とおほ

し」としたのであつて、歴史から離れんがためではなかつた。

注(1) 「源氏は夕霧を親王の子息に准じて従四位下に奏請しようと思は

れ、世間も大方さうであらうとおもつたのに」池田龜鑑校注「日本古典全書 源氏物語 三」四三頁、「親王の子供は、元服すると従四位下になるのが例。」山岸德平校注「日本古典文学大系 源氏物語 一」二七六頁、「夕霧は二世の源氏。親王や一世の源氏に准じて従四位下にしようと思はできるらしい。」柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注「新日本古典文学大系 源氏物語 二」二八一頁

(2) 「親王の子や一世の源氏は元服後従四位下になる。夕霧は二世の源氏だが、父の權勢により親王の子に準じて四位にすることはできる。」阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注「日本古典文学全集 源氏物語 三」一四頁、「親王の子は従四位下に叙する規定であるが、一世の源氏の子の場合は従五位下が通例である。源氏の場合は親王に准じたものか(河海抄「花鳥余情」)。」石田謙二・清水好子校注「新潮日本古典集成 源氏物語 三」一二〇頁。吉森佳奈子「河海抄」の光源氏「國語國文」第六五卷第二号、九六年二月は「河海抄」が他の注釈と異なり、光源氏を親王待遇に解釈している特徴を指摘している。

(3) 「大臣の子なら、元服してすぐ四位か五位になる。内大臣、執權であり、昨春秋、太政大臣に昇進の内定がありながら固辞し、一位になり牛車を聴許された一世の源氏がある。その第一子。母は、太政大臣の姫、祖母は桐壺の院(上皇陛下)」と同じ后腹の内親王。母の兄弟は、「ふな上達部のやむごとなき、御おほえことにてのみものしたまへば」。こう条件がそろえば四位が当然である。」玉上琢彌「源氏物語評釈」三三二頁

(4) 昨年発行の「新日本古典文学大系 源氏物語 二」二八一頁では

「夕霧は二世の源氏。親王や一世の源氏に准じて従四位下にしようと思えばできるらしい。」と断言を避けている。

(5) 土田直鎮「遷叙令」頭注「律令」七十六年、二七九頁

(6) 「皇兄弟皇子、皆封国、謂之親王」(「封爵法」、唐六典)

(7) 「親王之子、承嫡者、為諸王」(「封爵法」、唐六典)

(8) 「続日本紀」

(9) 「吏部記延長八年八月廿九日云々。一世源氏等伺候。疑無位間。応服直衣否。又疑殿上侍座次。源氏某被聽昇殿。彈正親王縱容候。氣色。上曰。無位一世源氏出仕公庭之事。近年無其例。仁和以前有此事。須問遇彼時之人。但昔嵯峨太上皇始賜源氏姓。欲使明朝廷策。詔曰若及第時賜五位。當其对策時。可叙六位。則知不殊平人。或賜六位。公時山田春興。亦奉詔「對學」欲對策。未果其本意。天皇崩。明朝廷賜四位。不對策。春興守光麤麤直衣。所未知也。又六位雖雜袍。不能服直衣。可相比定。又座次理應加六位上。雖然就五位上四位下得適敷。抑須問先例。延年八年九月八日辰時。余詣左大臣宿坊桂芳房。已剋依諸卿議。被定無位一世源氏座次。可着四位下五位上。」

(「政事要略」卷第六十九、黑板勝美編「新訂増補国史大系第二十八卷」三五年)

(10) 黑板勝美編「新訂増補国史大系 公卿補任」三八頁

(11) 雅信は左大臣に至るが忠清は参議に三十一才だったのを極官として五十九才で薨じている。

(12) 仁寿二年、基経は藤孫として十七才で藏人として出仕を始めている。時に養父良房は右大臣兼右大將、廟堂二位(一上は源常。二年後左兵衛少尉を経て従五位下。時に養父良房は右大臣左大將一上。特に准上皇の一小一条院敦明親王の子の源基平が一世源氏として扱われ従四位上に初任されていることに注目される。先に見た在原行平・源兼忠の例では皇統から離脱した家系の孫王には四位を与えられなかったのに、基平は通常の孫王以上の待遇となっている。こ

れには敦明親王の皇太子辞退という特殊事情があったにせよ、皇太子辞退事件の当事者・道長が没して十四年後の後朱雀朝でそれが考慮されるというのは、賜姓皇子孫の高貴を尊重する風潮を無視しては考えられないであろう。

(14) 藤木邦彦「延喜天曆の治」「平安王朝の政治と制度」九一年は延暦二十二年九月十日の藤原氏の子弟に女王を娶ることを許すとした詔は傍系であつた光仁天皇を皇統に擁立した功によるものと指摘する。これと同様に文徳系を廢して光孝系を皇統とした基経の功もその子弟への恩典としてあつたと解してよい。吉森佳奈子「河南抄」の光源氏「國語國文」第六五卷第二号、九六年二月も摂関子弟の初任年齢の若年化傾向と、摂関子弟の父の官位が一位ならざる時も初任五位であることを指摘する。

(15) 藤木邦彦「延喜天曆の治」「平安王朝の政治と制度」九一年は「皇室と藤原氏との血縁関係において注目すべきものに……皇女の藤原氏への降嫁のことがある。」として歴代の摂関家が自己の地位向上の為に皇室との血縁関係を深める努力をしてきたことと、その考え方が摂関家として伝統的なものであつたことを論証している。摂関家としては獲得した皇統との血縁関係の「成果」をその所生の子の初任叙位において特例を認めさせるといふ実利で確保したのであろう。

(16) 黒木伸夫「平安時代の位階制度」「平安王朝の宮廷社会」九五年では、平安中期には正五位上は特別の事情のない限り叙せられることがなく事実上消滅していたことが論証されている。

(17) 角田文衛「道長の榮達―御堂の御榮えについて―」「王朝の残映」九二年

〈資料一 關姓孝子の初任例〉

[illegible]

〈資料二 孫王（親王の子）の初任例〉

[illegible]

〈資料四 櫻岡子恵の初任例〉

[illegible]